

「運動の二極化」の生成機序に関する事例検討 - A中学校の体育授業から -

上田 祐貴

Example examination about the generation mechanism of “Bipolarization of sports” -Physical education class of A junior high school-

Yuki Ueda

1. 問題と目的

近年、「運動の二極化」という言葉をよく耳にする。平成20年に改訂された指導要領では「運動に興味を持ち活発に運動をする者とそうでない者に二極化し、生活習慣の乱れやストレス及び不安感が高まっている。」¹⁾と、「運動の二極化」について危惧している。また、子ども達の「運動嫌い」、「体育嫌い」という言葉も今日まで無くなっていないように思われる。文献による調査をおこなった結果、「二極化」には「運動に興味を持つ者とそうでない者」¹⁾、「体育が好きな生徒と嫌いな生徒」²⁾、「運動する子どもとそうでない子ども」³⁾ また、「運動能力の高低」⁴⁾の定義があった。更に、「運動嫌い」、「体育嫌い」の生成する共通点に体育授業や体育教師の存在が示唆された^{2) 5) 6)}。しかし、「運動の二極化」がどのようにして形成されているのかを明らかにした研究報告はなかった。

そこで、本研究では「二極化」を中心とする運動への否定的態度の問題をブルデューの「ハビトゥス」、「プラティーク」及びマルクスの「疎外」という概念の視点で捉え、体育授業における「二極化」の生成機序を明らかにする。「ハビトゥス」とは人間の慣習の総体であり、「プラティーク」とはそれに基づく無意識的な振る舞いである。「疎外」とは本来は手段として行っているはずであるものが、いつしかそれを行うこと自体が目的へと変化してしまうことである。

2. 方法

「ハビトゥス」、「プラティーク」、「疎外」の一般概念を文献から抽出、要約し、体育授業への置き換えを行う。更に、それらの視点から体育授業を参与観察し、実際の体育授業の中に三つの概念がどのように作用しているかを調べる。

(1)調査対象 A中学校1～3年 計19組

(2)データ取得方法及び分析

筆者が授業を観察記述する。その際、消極的な生徒の言動とそれに関係すると考えられる事象(教師や他の生徒の言動)に注目する。観察記録はKJ法⁷⁾を参考に分類し、「ハビトゥス」、「疎外」と考えられる事象に命名する。更に、命名した事象のうち、同義として考えられるものを集約し、「二極化」との影響の関係を検討する。

3. 結果と考察

3-1. 「ハビトゥス」の命名と集約結果

表1は観察記録から「ハビトゥス」として考えられる事象を命名し、まとめ、これをコード化して集約したものである。

「運動の二極化」につながると考えられる20種類の「ハビトゥス」を導いた。

「他者への遠慮」や「失敗への懸念」などの運動技能が低い生徒の持つ「ハビトゥス」に基づいた「プラティーク」によって、技能が低い生徒は練習回数を自ら放棄してしまうことが多くあった。更に、運動技能が高い生徒は、「勝利への執着」や「技能が低い生徒の軽視」などの「ハビトゥス」

があり、それに基づく「プラティーク」によって、他の生徒から学習機会を奪ってしまう。これは「運動技能の高低」の「二極化」の生成につながると考えられる。更に、運動技能の高い生徒は低い生徒から学習機会を奪いながら楽しそうに運動に親しみ、運動技能の低い生徒は立っただけの状況に陥る様子が多く見られた。これらは「運動嫌い」や「体育嫌い」の生成、更には「体育が好きな生徒と嫌いな生徒」、「運動に興味を持つ者とそうでない者」や将来的には「運動する子どもとそうでない子ども」の「二極化」の生成につながると考えられる。

表1

「技能が高い生徒への遠慮」	
「ゲームにおいて運動技能の高い生徒への遠慮」	他者への遠慮
「自分の技能低いことからゲームへの遠慮」	
「技能が低いことへの自覚からの遠慮」	
「ゲームにおいて自分以外の生徒への遠慮」	
「技能が高い生徒への遠慮」	他者への遠慮
「チームメイトへのゲーム展開の遠慮」	
「相手生徒からの自分以外の生徒への遠慮」	
「失敗への遠慮」	失敗への遠慮
「痛みへの遠慮」	
「相手種別からの遠慮」	
「自分の技能が低いことへの遠慮」	
「他者への技能の羞恥」	自らの運動能力に対する羞恥
「自分の技能が低い技能が高い生徒と比較されることへの遠慮」	
「技能が高いことへの自覚からの羞恥感」	技能が高いことから羞恥感
「ゲームにおいて技能の高い自己の役割の自覚」	
「勝利への執着」	勝利への執着
「技能の低い生徒の学習意欲を促すまで勝利にこだわらぬ」	
「ゲームにおいて技能が低い生徒の軽蔑」	技能が低い生徒の軽蔑
「ゲームで技能の高い生徒のみの学習意欲」	軽蔑
「自己の羞恥」	自己の羞恥
「自分の羞恥よりも友人関係の優先」	友人関係の優先
「ゲームの勝利よりも友人関係の優先」	
「友人への遠慮」	友人への遠慮
「自己を蔑むことへの遠慮」	
「パートナーへの遠慮」	友人への遠慮
「教師の指示への服従」	教師への服従
「孤立への拒絶」	孤立への拒絶
「自分以外の生徒が練習を行っている中、自分一人が休むことへの動機」	
「羞恥への回避」	羞恥の回避
「ゲームの勝利よりも失敗を懼れがちな」	羞恥の回避
「生徒の失敗に対する笑いへの羞恥」	羞恥の回避
「生徒の失敗に対する笑いへの羞恥」	羞恥の回避
「教師の技能が高い生徒への期待」	技能が高い生徒の期待
「足の速い生徒への期待」	期待
「運動能力の低い生徒を軽蔑」	技能が低い生徒の軽蔑
「教材づくりの際の教師の運動技能の低い生徒を軽蔑」	軽蔑
「授業中に羞恥しない」	授業中の羞恥
「教師の授業中の羞恥」	
「生徒の羞恥を助長」	生徒の羞恥の助長
「スムーズな授業展開の羞恥」	授業展開の羞恥

また、「友人への遠慮」など、運動技能の高低に関わらない生徒の人間関係に関する「ハビトゥス」による運動機会の放棄があった。

また、教師の問題としては教師自身が持つ「ハビトゥス」に基づく「プラティーク」により、技能が低い生徒が学習機会を放棄し、技能が高い生徒が学習機会を奪取することを助長することが明らかになった。

3-2. 「疎外」の命名と集約結果

表2は観察記録から「疎外」として考えられる事象を命名し、まとめ、これをコード化して集約

したものである。

表2

目的に適していないウォーミングアップ	教師の知識不足
自らの技能水準に適していない運動課題	
ゲームにつながらない話し合い活動	
テストのための学習	意図通りに行動させたいという教師の思い
評価による生徒行動の統制	
評価の偏重	
教師への恐怖心による強制的な運動	

「疎外」の観点から体育授業を分析した結果、大きく分けて7種類の疎外があった。

その原因として、「教師の知識不足」と「意図通りに行動させたいという教師の思い」があると考えられる。教師の「教材に関する知識不足」により、技能向上に繋がらない運動課題を行うことや、「意図通りに行動させたいという思い」が原因で起こる評価の偏重や恐怖心の植え付けによって、技能向上に繋がらない行動を半ば強制的に生徒に取らせることが多く見られた。それによって生徒は「疎外」を受けていることが分かった。これらは「運動嫌い」や「体育嫌い」の生成や「体育が好きな生徒と嫌いな生徒」、「運動に興味を持つ者とそうでない者」の「二極化」の生成につながると考えられる。

3-3. 体育授業における「運動の二極化」の生成過程の構造図

体育授業内では、生徒が持つ「ハビトゥス」に基づいて起こる運動機会の放棄や奪取などの「プラティーク」によって、学習機会が異なる。また、それは「運動嫌い」や「体育嫌い」の形成にもつながる。更に、教師は自らの持つ「ハビトゥス」に基づいた「プラティーク」や「疎外」の含んだ授業を行うことで生徒の学習機会の差の開きを助長したり、生徒に有効な学習を行うことができない状況を生み出す。そういった繰り返しにより「運動の二極化」は生成される。また、それは「運動嫌い」や「体育嫌い」の形成にもつながる。「運動嫌い」や「体育嫌い」の生徒の形成はその後に受けるであろう体育授業内で、さらに「二極化」を広げることが予想できる。

図1はこの展開過程を表したものである。

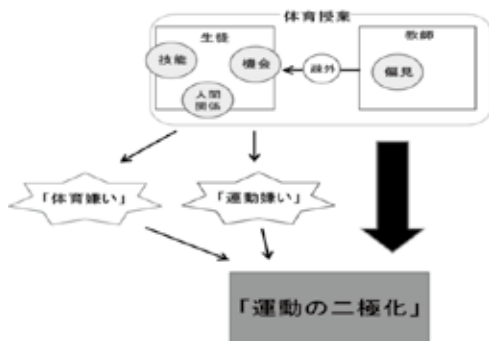


図1

4. まとめ

体育授業において運動の「二極化」の生成に関するメカニズムとして、生徒が持つ要因と教師が持つ要因に分けられることが分かった。

生徒側の問題としては運動技能が低い生徒や人間関係に関する「ハビトゥス」に基づいた「プラティーク」によって、練習回数を自ら放棄してしまうこと。

更に、運動技能が高い生徒は技能が高い生徒特有の「ハビトゥス」があり、それに基づく「プラティーク」によって、他の生徒から学習機会を奪ってしまうことである。これは「運動技能の高低」の「二極化」の生成につながると考えられる。

また、教師の問題としては教師自身が持つ「ハビトゥス」に基づく「プラティーク」には技能が低い生徒が学習機会を放棄し、技能が高い生徒が学習機会を奪取することを助長することがあることが明らかになった。また、教材に関する知識不足により、技能向上に繋がらない運動課題を行うことや、意図通りに行動させたいという思いから、評価の偏重や恐怖心を煽ることにより、技能向上に繋がらない行動を半ば強制的に生徒に取らせ、生徒は「疎外」を受けていることがあった。

教師がこの現状に気付かずこのような体育授業を行い続けることで、生徒は体育授業内で同様の行動をとり続けることが予想される。それにより体育授業内で「運動嫌い」や「体育嫌い」の態度を生徒に育成し続け、今後ますます「二極化」を更に広げることになるであろう。このような現

状を踏まえ、体育教師は「運動の二極化」を防ぐために一刻も早く生徒や自らの持つ「ハビトゥス」を認識し、生徒一人ひとりに目を向けた「疎外」のない授業を行わねばならない。

参考文献

- 1) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健・体育編」p.15 東山書房(2009)
- 2) 波多野義郎 「『運動嫌い』の生成機序に関する事例研究」日本体育学研究 第26巻 第3号 pp.178-187 (1981)
- 3) 三木四郎「子どもの二極化から体育指導を考える」体育科教育 第49巻 第3号 pp.4-13 大修館書店(2001)
- 4) 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo3/004/siryu/07091203/002.htm
- 5) 浅田隆生 「運動嫌いを形成するもの—学習者をつまづきとの関連で」体育科教育 第28巻 第10号 pp.12-15 大修館書店(1980)
- 6) 伊藤精男 波多野義郎 「『体育授業ぎらい』の生起に関する因果推論の試み」日本体育学研究 第27巻 第3号 pp.239-245(1982)
- 7) 川喜田二郎「発想法」pp.65-115 中公書店(1992)
- 8) ピエール・ブルデュー 石井洋二郎訳「ディスタンス—社会的判断力批判(1・2)」pp.41-477 藤原書店(1990)
- 9) ピエール・ブルデュー 今村仁司、巻道隆訳「実践感覚」p.150 みすず書房(2001)
- 10) 宮島喬・石井洋二郎「文化の権力 反射するブルデュー」pp.11-217 藤原書店(2003)
- 11) カール・マルクス「経済学・哲学手稿」城塚登・吉田吉六訳 p.84-106 岩波書店(1964)

(指導教員 森 勇示)